

れたが、決する所あり、独立のため退職。時に昭和三十一年、裸一貫、シベリア時代の労苦を偲び一心不乱、無我夢中にて働き続け、ようやく人並みになり、気のついた時には三重県でも中堅企業の一つに仲間入りされていた。

(愛媛県 山本 繁夫)

シベリアの英霊に思う

愛媛県 三好 清一

昭和二十年十月七日、私はコムソリスクからアムール河を渡り、約一昼夜の後、とある山あいの線路傍に下ろされ、初雪のあとと思われる山道を少し登った先の収容所に入った。

その日より遡ること二カ月、八月七日頃であったか、私たち重砲第一二一五部隊の新兵数名は、凶門の近くの川原で砂利の採集をしていた。小休止があり、ふと空を見上げたとき、もはや我が国にはないものと

思っていた四発の重爆が(実はソ連機であったが)悠々と飛んでいったのを今も忘れることが出来ない。その直後のことラッパが鳴り渡り、中隊のトラックが私たちを拾いにやって来た。

「あのラッパは内地転属かも知れんぞ」などともない、平和な大日本帝国陸軍は急転直下戦闘状態に入り、不眠不休の大砲据え付けは一応完了したものの、当方の状況を知り尽くした敵方は、虎の子の二四榴弾チヂの背後を突いて来たのである。「背に腹はかえれぬ」、今晚斬込みと覚悟を決めたのが八月十五日の昼前であった。身を清めて夕暮れを待つうちに、幸い終戦の無電が入ったのである。

その日から丸腰で目的を失った敗残の兵は、惨めな姿をさらけ出して凶門・延吉と転々し、二〇〇キロ行軍という苦しく長い、しかも一日一袋半の乾パンでの行軍を強いられたのである。その間、激戦のあった陣春を通ったとき、敵戦車のひっくり返っているすぐそばには必ず日本兵の屍が膨れ上がって腐臭を放っており、思わず逃げる自分の冷たい心に、戦死者への申し

訳のない罪悪感を覚えずにはおられなかった。そして同じ街道を昼夜の別なくソ連のトラックが走り、火事場泥棒よろしく満州の物資を運び去るのを見て、さらに敗戦の憂き目を見、激しい憤りを感じたのを忘れることができない。

こうして、やっとの思いでクラスキノの丘に辿りつき、くつきりと青く光る日本海を見たとき、「内地に帰れる！」その喜びに思わずハラハラと落涙してしまったが、狡猾で機を見るに長けたロシアは、すかさずメガホンで言ったものである。「日本の兵隊さん！あなたたちはもうすぐ日本へ帰るのですよ、あなたたちが今持っている持ち物は、全部日本の船の中で取り上げられますから、その場に置いて身軽になってください！」行軍に強い歩兵などは故国への土産品にと身の丈以上に背負っていた毛布を惜しげもなくその場に置いて、日本の船を楽しみにクラスキノの野に案内されたのである。私も騙されていたが、日本人で何とお人好しか？

折からその地方は雨期に入ったのか雨続きで、大幕

のない私たちは毛布を持ち寄ってテント代わりとし、雨の滴る寝床の中で腹も何も冷やしてしまった。胃腸の弱い私は下痢が止まらないまま貨車に積まれて収容所に送られたが、その頃は完全に栄養失調の状態になっていた。

そのラーゲリに入って間もなく所内の清掃があり、生来几帳面な性格から内柵を越えて中のゴミをとりに入ってしまった。入所早々で、そこへ入ると逃亡と見なされることなど知るよしもない。「バシッ！」という音がして足元の小石が飛び散ったのである。何事か？と顔を上げる私を、パッと飛び込んできた監督の将校が慌てて私を引きずり出してくれたので事なきを得たが、すんでのところ、私は望楼のソ連兵に殺されるところであった。次にその後同じケースが起こったが、その時の兵は撃ち殺されたということである。戦時中でもなく、夜間でもない真昼間、しかも大勢の人中で何故警告もなく狙い撃ちする必要があったのか。ヤポンスキーの一人や二人、鳥けものと同じに扱うソ連兵の神経、いやソ連という国の非情さと、何の

抵抗も出来ない虜囚の運命を感じたものである。

それから間もなく本格的なシベリアの冬が始まったが、私たちが凍てついた山の伐採に駆り立てられることになった。しかし、立っているのが精いっぱい体力と苛酷な作業の前に、私はもはや生きる自信を失い、近い死を覚悟しなければと思いつめていた時、ある夜突然にソ連軍医の回診があり、私は即日入室療養する身となった。「働かざる者、喰うべからず」と一食二―三個の三センチ角に切った黒パン以外何もなく、空腹にたまりかねて作業隊に復帰を希望する者もあつたが、寒さに弱い私は外に出れば確実に死が待っていると空腹に耐えていた。そのうち私を入れた二十人くらいの者は、線路づたいに徒歩で集中病院らしきところに入ったが、そこで四十度近い高熱に襲われ、そのまま冬を越すこととなったのである。そろそろ作業隊に帰されるのかと不安を覚えていた矢先のこと、その発病が幸いし、しかも回復に手間取ったためか、昭和二十一年の一月中頃、重病人として約半日列車に乗り陸軍病院と称する本物の病院に入れられた。かく

して、その年の雪も完全に解けた頃、私たち弱体班を乗せた有蓋列車は、その前年に走ったレールを反対に走り、六月頃北鮮の清津に渡ったのである。そして三合里、秋乙をはじめ二、三の地を転々とし、二十二年正月二日、やっと日の丸のついた船でダモイするに至った。

さて、私の俘虜体験など語るべきものは何一つないが、私が無事にダモイできたのは、ただただ幸運に恵まれたということに他ならず、その裏には、不運にも命尽き、事故のため恨みを呑んで異国の土となった六万の犠牲があつたという事実を忘れてはならない。

それについても思い出されるのは、私の中隊長であつた近衛文隆中尉の不運な獄死である。近衛中尉は私の入隊当初から、大した力量もなく弱い私を庇うように温かく見守ってくださつたが、それは私一人に対してと言うより、中隊全員に対する全人格的なものであつて、全員の敬愛を集め、当然ながら将校仲間においてもスター的存在であつた。公家筆頭の近衛の世嗣であり、希に見る才能ある美丈夫でありながら一兵卒

から叩き上げられたのである。その生い立ちに加え、長年の外国生活で磨き上げられた豊かな国際性、雅量と気品に満ちた温かい人間性が、ソ連のいわれない戦犯宣告による十年の苦闘によって更に奥行きを増し、恐らくは戦後の日本を背負って立つ世界的政治家になっておられたろうにと惜しまれてならない。

話がそれだが、私はソ連の酷使にあわず済んだことを恥とは思わないが、それに耐えてダモイした戦友に対する一種の負い目から、抑留の話を進んで人に語る気にはなれなかった。しかし四年ほど前、竹馬の友であり、学友であり、同じ部隊に入った戦友山本繁夫君が、執念とも言うべき熱情をもって「シベリア絵画展」を開き、続いて「愛媛シベリア慰霊の碑」建立に立ち上がったとき、無謀とも思えるその計画に一抹の不安を感じながらも彼の情熱にほだされ、一臂の力ももなったのである。何らの組織もなく、社会的名声もバックもなく、まして資金力ゼロの彼が、思いもかけない純粋な善意の人々の協力を得て見事にこれを全うすることが出来たのは、一にかかって六万の英霊によ

るものと私は考えている。山本君がシベリアの遺骨収集団に参加し墓地と称される森の一角に立ったとき、彼にだけ無数の戦友の魂が慕い寄り、鬼哭啾啾、浮かばれぬ戦友の霊圧を感じたというのである。私は彼に「この碑の成功は、彼等戦友の霊の涙によることを忘れまいぞ」と話している。

私は、これによって亡き戦友の霊を少しは慰め得たと思っているが、シベリア強制抑留という歴史的事実が既に風化しつつあることを、この慰霊碑建立に際し、痛切に感じてきたものである。そんな中においてメディアの絶大な協力、大口小口の純粋な個人献金など、その風化に歯止めをかける希望もまた与えられたのである。

【執筆者の紹介】

大正十三年八月二十一日、松山市唐人町に生まれる。

学歴 松山経済専門学校卒（卒業前召集）

入隊 昭和二十年二月 重砲兵第三連隊第一二一五

部隊

終戦地 東満 問島省凶們街西方高地

戦友会 満州第一二一五部隊会所屬

四国戦友会所屬

職 歴 昭和二十二年十月（現在の四国電力）入社

昭和五十六年九月停年退職

退職後家業に従事、今日に至る

平成十一年（財）全国強制抑留者協会愛媛県支部副

支部長兼事務局長

三好清一氏は私の幼友達であり、小学校・商業学校・軍隊とずっと一緒であり、現在も時々喫茶店でコーヒーを飲みながら話し合う仲である。彼は子供の頃から優秀であった。旧制の松山高商在学中に学徒の繰り上げ入隊となり、入隊されたのは有名な近衛文隆中尉の二中隊へ、幹候試験は甲幹であったが終戦のため任官も出来ず、抑留され随分と体調が悪く、人には言えない苦勞をされたようである。運よく早く復員出来たのは何よりも幸いであった。

終戦後の闇経済の時代に御両親を見るため随分と難

儀をされたが、秀才の彼には新しく出来た四国電力という会社が待っていてくれて、若い時は支店、出張所と、中年には本店や支店の管理職として腕を奮い、停年後は奥様と一緒に松山市の商店街で商売をしておられる。平常温厚な性格に視野の広い世界観を持っておられ、色々と教えて頂くことが多い。平成八年の愛媛シベリアを語る会のシベリア抑留絵画写真展の時には実行委員として会計を担当してください、平成九年の財団法人全国強制抑留者協会愛媛県支部の監事を、平成十一年には副支部長兼事務局長として扇の要の職をお願いしている。

（愛媛県 山本 繁夫）

シベリア抑留生活の回想

愛媛県 武市 一雄

大正十三年八月二十一日、松山市花園町に生まれ、番町幼稚園、雄郡小学校を経て、愛媛県立松山商業学